

ARC2020 参加記

塚原義央

佐々木健氏の紹介により、2020 年 10 月 30 日から二日間にわたって行われた *Accademia Romanistica Costantiniana* (以下 ARC) 円卓会議にオンラインで参加する機会を得た。以下では同会議へ参加した感想を記すことにする。同会議は隔年で開催され、翌年に開催される同学会主催の国際会議へ向けた準備会議となるものである。なお前回 2018 年に開催された円卓会議の様子はすでに活字化されており (*La burocrazia tardoantica : profili per una ricerca : in memoria di Alessandro Mancinelli : tavola rotonda (Spello, 22 e 23 giugno 2018) in preparazione del XXIV convegno internazionale, materiali di discussione raccolti da Maria Luisa Biccari. Ali&no editrice, 2019*)、またその翌年 2019 年に開催された国際会議の様子は本誌創刊号に佐々木氏による参加記 (佐々木健「スベッコ便り 2019」ローマ法雑誌、創刊号、2020 年、167-176 頁) が掲載されているので、そちらを参照されたい。

ARC はペルージャ大学の研究者らを中心に運営されており、初日のオープニングでは同大学法学部長の *Andrea Sassi* や市長による挨拶もあった。また同会が *Giuliano Crifò* により創設されたこともあり、同氏についての発言もあった。また *Riccardo Orestano* といった往年のローマ法研究者についての発言もあり、さすがイタリアを思わせる雰囲気であった。今回の円卓会議のテーマは、前回国際会議のテーマであった「武装なき公務と武装公務：古代末期における文民組織と軍事組織」を受けて、「古代末期研究の可能性」を主題として議論された。登壇者がランダムに発言し、資料も共有されぬまま次々に登壇者が変わったので、正直なところパソコンの画面上

で登壇者の名前を追うばかりで内容は二の次になってしまい、最後に今回円卓会議及び翌年の国際会議のキーワードとなる「法的言語、法律言語 *linguaggio giuridico, legale*」をкаろうじて確認する程度であった。しかし今までその論文や著作を通してしか見たことがなかった研究者たちの姿を画面を通してではあるが拝見できたのは新鮮であった。中でも印象に残ったのは、筆者が過去にローマ法の古典期法学者の一人であるケルススについて研究をしていた際、主たる先行研究として参照した著作の著者である Yuri Gonzalez Roldan 氏も参加されていたことである。同氏の研究は、紀元後 129 年にケルススがコンスルに就任していた際に決議されたとされる元老院議決の分析を中心とし、それに対する古典期法学者ウルピアヌスの解釈を扱ったもので、その後は占有に関する研究へと展開している。もし対面で参加できていればその場でご挨拶をしたいところであったが、オンラインのためそれはかなわずまた次回へと持ち越しとなった。ローマ法研究においてはもちろん本場はヨーロッパであるため、そこで開催される学会に参加した方の話から綺羅星のごとく有名なローマ法研究者に会うことができたと聞いていたが、それを実感することができた。

また Napoli 大学関係者からの提案で、第 26 回国際会議を Francesco Amarelli に捧げることが了承された。同氏はローマ帝政期において皇帝たちが組織していたとされる皇帝顧問会についても研究を残されており、筆者もその研究成果を拝見したことがある。日本国内では私法を中心としたローマ法研究の成果が多いが、このような国制や歴史学にも関係する研究が多くなしているのもイタリアならではである。ローマの法学者を研究する筆者の身としては、

今後もこれらの研究者たちの業績を丹念に追っていく必要性を感じた。また ARC はその名の通り古代末期を中心として研究するものであるが、日本国内においても近年、ローマ史研究において古代末期の研究は興隆を迎えているように思われる。法制史における研究成果が、ローマ史研究にも生かされることを願うものである。

コロナ禍中での開催となった今回の円卓会議はオンラインでの開催となり、microsoft の teams を用いての開催となった。私自身、初めての海外での国際会議への参加となったが、まさかこのような形でオンラインでの参加になるとは思いもよらなかった。しかしながら今回のオンライン円卓会議では参加者全員が慣れない中でも活発な議論が交わされたのもあり、盛況に終わった感がある。イタリア人の研究者が多かったが、予想はしていたもののランダムな発言が続き、パソコンの前であっけにとられる場面も多かった。十年以上も前の学部生時代にイタリアへ留学した経験を何とか呼び起こしながら、終始飛び交うイタリア語の議論に必死に耳を傾けていたような始末であった。惜しむらくは口頭での発言が延々と続いたため、文書での資料も配布、あるいは画面で共有すると参加者はより分かりやすかった。しかしながら参加者たちがログインし、画面上で互いの表情を確認するなり「Ciao!」と元気に声を掛け合う様子は、どんな場であっても変わらないイタリア人のメンタリティーを垣間見、本学会の温かみを感じることができた。コロナ禍が明けたら今度は是非、イタリアの地で参加してみたいと思う。

またオンラインでの開催ではあったが、オンライン開催の大きな可能性も感じた。まず場所を問わずに参加できるという利点がある。また資料の共有等も迅速にでき、下手に資料を配るよりもパソコン

に映し出された画面を共有した方が聞き手にも分かりやすく伝えることができるのではないかと思うこともある。これらはオンライン授業の展開にも通ずるものであるが、デジタル化が進む現代においてもっと早く実現できればよかったのではないかと思う部分もある。いつでもどこからでも参加できるオンライン会議は、今後の学術研究に大きな進展をもたらすであろう。

今回はオンラインでの参加となったが、ペルージャには学部生時代にイタリア留学した際に訪れたことがある。さすがエトルリア人が建てたとされる都市だけあって、坂をのぼれば中心街に着くというような丘陵地であったことを覚えている。歩き疲れてクタクタになり辿り着いた中心街ではフォンターナ・マッジョーレやサン・ロレンツォ大聖堂を見たことが懐かしい。またアウグストゥス門を見たのも良い思い出である。ペルージャはさすがシエナと並ぶ外国人大学がある関係で留学生に溢れ、国際性豊かな都市であったことを覚えている。日本の大学も国際化が急速に進んでいるが、同都市から学ぶべき教訓は多いかもしれない。またペルージャ大学のモットーには「*antiquam exquirite matrem*」とあるが、翻訳すれば「古の母を知れ」となるか。学問を深める上では歴史が必須となることを、同モットーは留学生たちにも伝えているのかもしれない。学術研究と教育のオンライン化、そして法制史及び歴史研究がそれにどのように対応し、またオンラインによる教育および国際化を進めていくのか。今回のオンラインでの円卓会議への参加は、それにも示唆を与えてくれたように思われる。